

「史跡磨き上げプロジェクト 横須賀城跡」

2024. 11. 03

加藤理文（日本城郭協会）

大須賀康高が築城した頃の横須賀城は松尾山城とも呼んでいたようですが、小笠山丘陵上に立地している曲輪群から構成された山城であったと考えられます。これらの外周は堀が廻らされており、北側の一部を除くと水堀でした。堀の中で、西側、東側はその後の改修で埋められ、牛池、三日月池、御殿池の形で一部が残されました。また、南堀の一部も改修されたと考えられています。

天正8年（1580）に一応の完成を見た横須賀城は、当初高天神城攻めの前線基地とするために築かれました。ところが、高天神城の周囲にいわゆる高天神城攻めの六砦が築かれると、これらの砦への兵站基地としての役割を担う中心となったのです。一方、馬伏塚城を前線基地としていた時期には、武田の兵が下街道から進入して狼藉を働くこともありました。この下街道は、近世に掛塚街道と通称された新砂丘上の道と考えられています。こうしたことから、海岸線と湊の防備の一翼も担いました。

横須賀城は、豊臣秀吉の天下統一に伴い、近世城郭へと発展して行くこととなります。横須賀城の天守建設は、渡瀬繁詮の時で、この時静岡県内に入封した豊臣大名がこぞって天守を建設しています。全国唯一の河原石積みの高石垣もこの時期に作られました。この頃から城下町の整備も進み始めましたが、完成にはなお年月が必要でした。渡瀬繁詮は、秀次事件に連座し処罰され、変わって有馬豊氏が入り、整備改修工事を引き継いで完成させました。

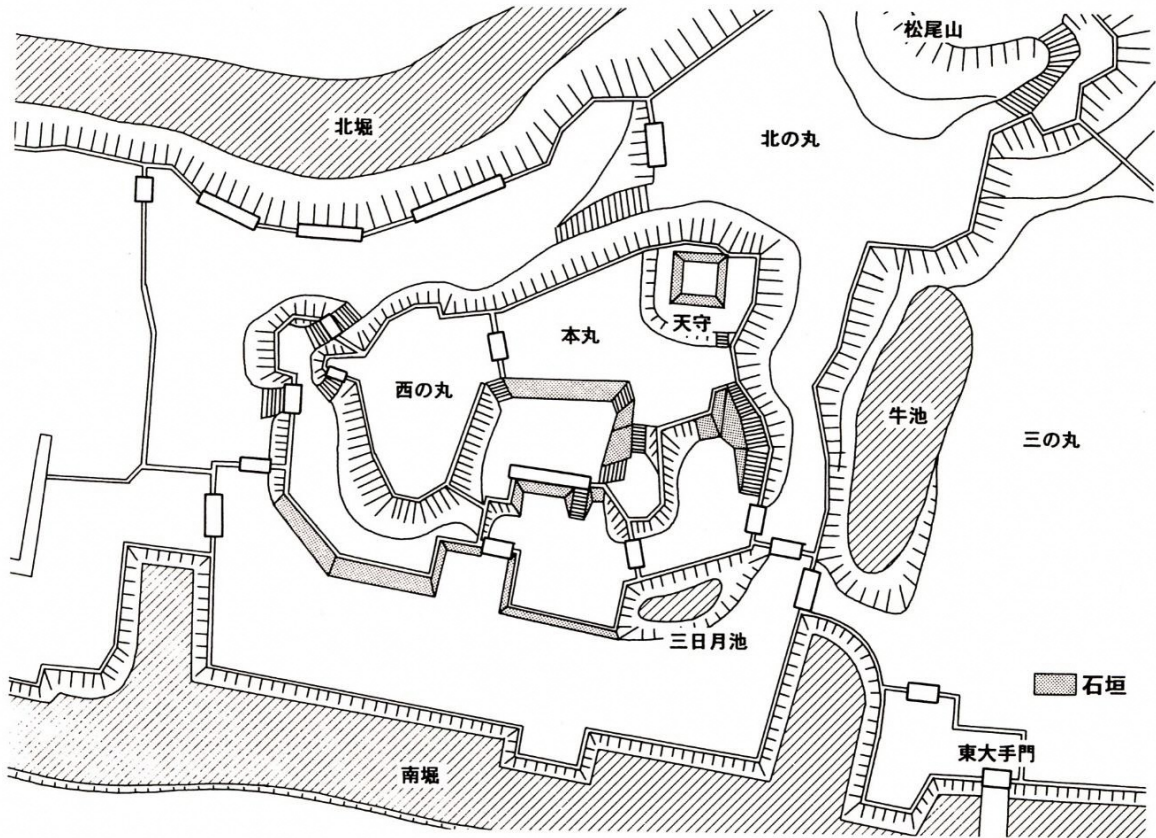
その後、江戸幕府になり再び徳川譜代の支配する城となったのですが、城と城下に大きな変化は認められません。井上正利が城主になると現在の三の丸部分が拡張されます。さらに、本多利長の時期に砂丘上に現在の二の丸が拡張されることとなります。横須賀城には、二の丸部分に西大手があり三の丸部分に東大手があるのは、上記2回の城域の拡張によって、それぞれ大手が置かれたためと考えられます。

江戸期の横須賀城は、横須賀湊の守り、中遠地域の年貢積み出しの流通拠点、沿岸部の支配などの拠点でした。湊の守り・沿岸の支配では、河口閉塞のために度々の改修が必要だったようで、天和3年（1683）には港口成就の為に今沢弁天を建てています。流通では、廻船問屋清水家の隆盛や、撰要寺の釈迦石造で知られる廻船問屋来家多七などでうかがい知ることができます。

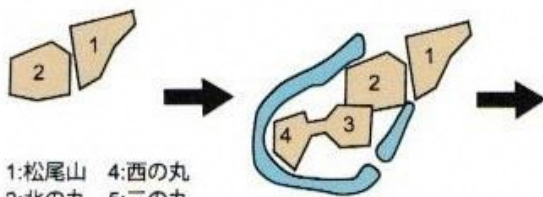
城下町は、城主が変わるたびに整備が進んだ。特に5万石以上を知行していた10代井上氏から12代本多氏の時期に大きく進み、現在の祖形が完成したと思われます。

横須賀城の役割の変化

- 1 高天神城攻めの前線基地
- 2 高天神城包囲網への兵站基地
- 3 高天神落城後の中遠海岸部の支配拠点
- 4 中遠地域の湊の守りと流通支配
- 5 中遠海岸部の支配拠点



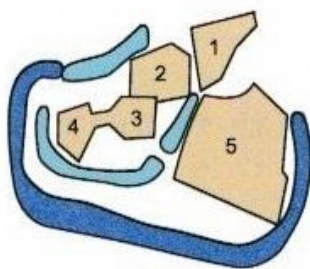
織豊期段階の中枢部



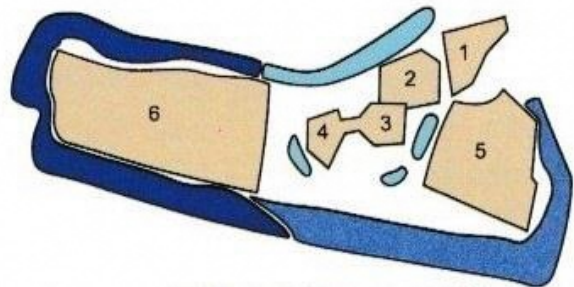
- 1: 松尾山
- 2: 北の丸
- 3: 本丸
- 4: 西の丸
- 5: 三の丸
- 6: 二の丸

I期: 徳川家康

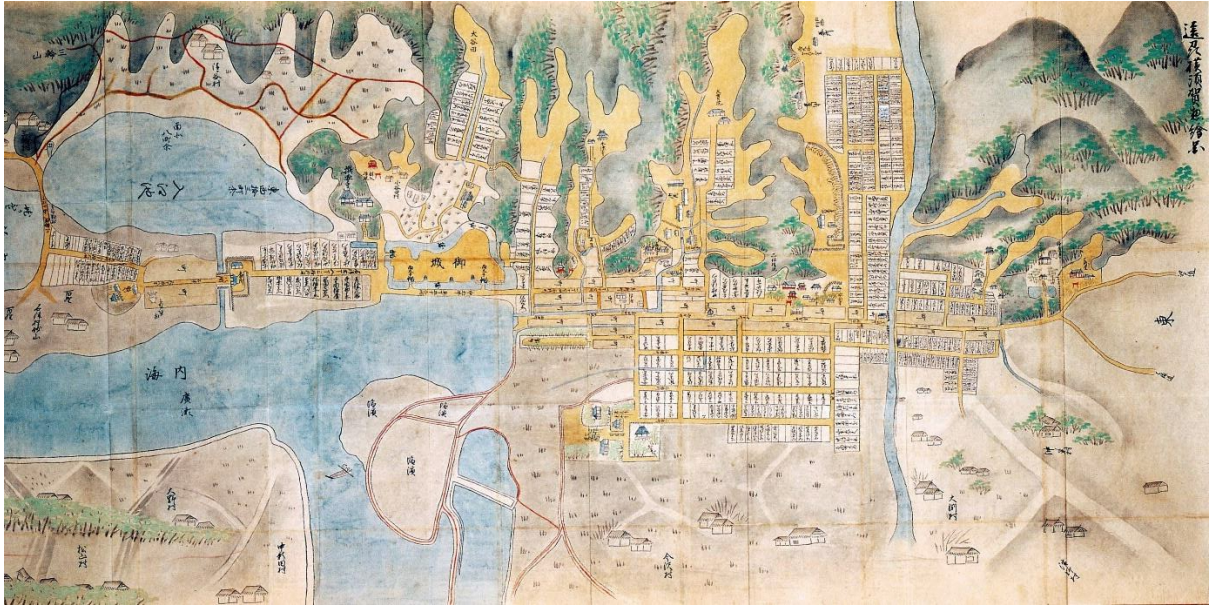
II期: 大須賀康高～井上正就



III期: 井上正利

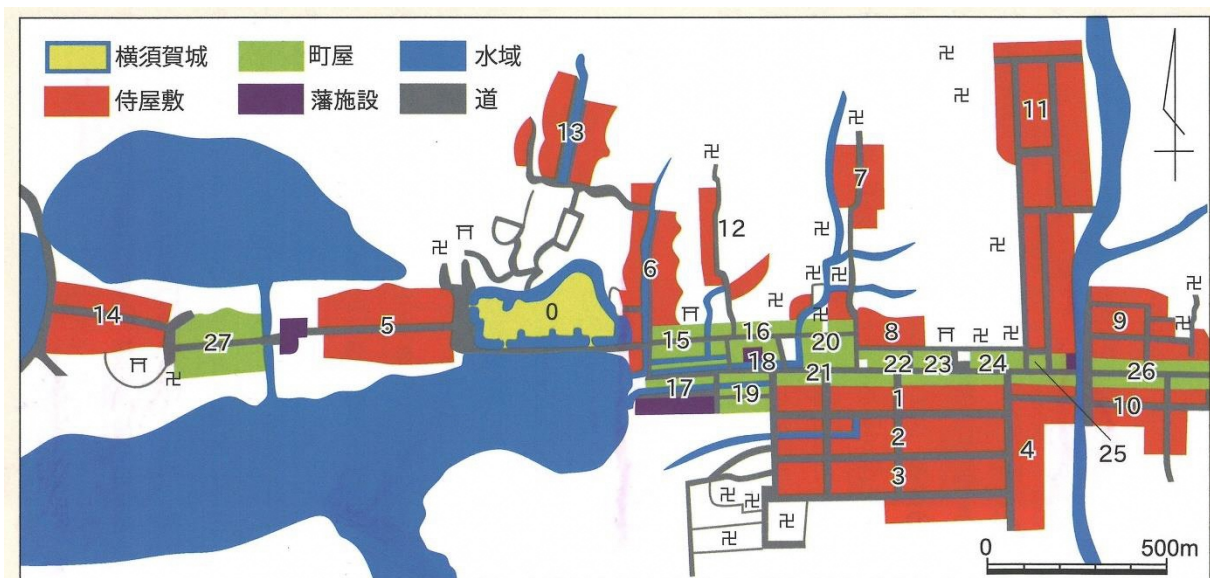


IV期: 本多利長～西尾忠篤

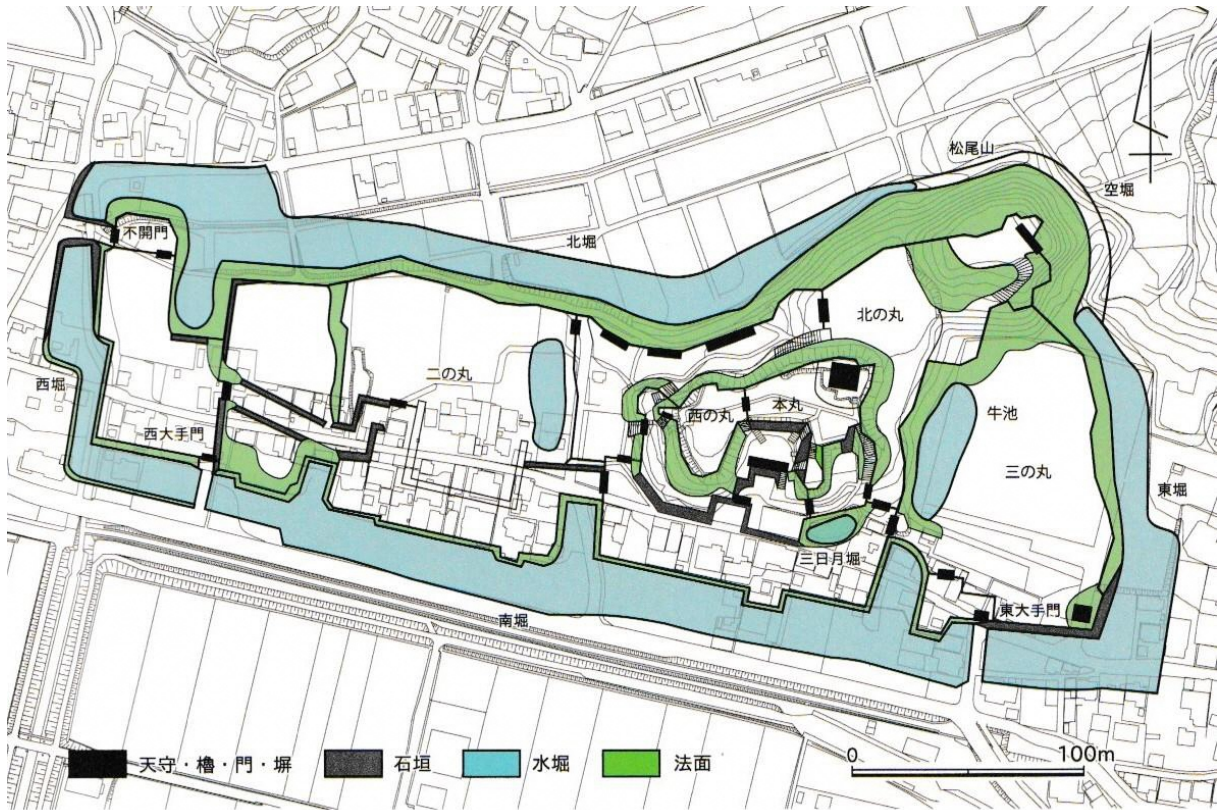


『遠州横須賀惣絵図』（個人蔵）

- ① 遠州灘へと続く、残存潟湖を利用した築城
- ② 碁盤の目状に配置した東側の武家地
- ③ 背後の山に広がる武家地
- ④ 街道の両脇に配置された町家
- ⑤ 街道と海岸堤防を兼ねた交通路の取り込み
- ⑥ 内海に設けられた入江（港）掛川藩等の年貢津の積出港



正保期～天和期（1644～84）の横須賀城下町（『遠州横須賀惣絵図』により作成）



『遠州横須賀城図』 国立国会図書館ウェブサイト (<https://dl.ndl.go.jp/pid/1286314>)

17世紀前半頃の横須賀城を描いた絵図。曲輪配置がわかるとともに、城は水堀（一部空堀）に囲まれ、城の南は潟湖（内海）に面していたことがわかる。